

雪の音

ゆき

おと



Vol. 143

令和3年10月15日発行



巻頭言	建設コンサルタント業への期待	北陸地方整備局長 岡村次郎	1
特集	金沢城の史跡整備 ～都心の歴史文化の交流拠点形成への取り組み～	石川県土木部 参与(公園担当) 丸山隆史	2
寄稿文	華やかなりし出雲崎の記憶	みなとまち町家の会 磯部由記夫	8
ちょっと気になる コーナー	美人の湯 月岡温泉がある城下町新発田市	(株)新潟トラベル 常務取締役 山崎康裕	12
お知らせ	「白山外来植物除去作業 in 市ノ瀬」開催報告	技術部会 建設環境委員会 広報部会 広報委員会	14
お知らせ	令和3年度 北陸支部防災演習	災害対策部会 総務委員会	16
	会員名簿 役員・委員名簿	事務局	19
	編集後記	太田博昭	

[題字]

元北陸地方建設局長
廣瀬利雄 揮毫

[表紙・裏表紙写真]

タイトル 雨の清水園
撮影地 新潟県新発田市大栄町
撮影者 猪俣孝之

巻 頭 言

建設コンサルタント業への期待

北陸地方整備局長
岡村次郎



国土交通省では、「ICTの全面的な活用」等の施策を建設現場に導入することによって、建設生産システム全体の生産性向上を図り、魅力ある建設現場を目指す取組であるi-Constructionを進めています。これらの取組により、全国の建設現場を新3K（給料が良い、休暇が取れる、希望が持てる）の魅力ある職場に改善することを目的に、2025年度までに建設現場の生産性を2割向上させることとしています。

また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、建設業でもこれを奇貨として「非接触」や「リモート」をキーワードとする監督・検査を遠隔臨場により新たな施策として急展開しているところです。

北陸地方整備局管内の大河津分水路改修事業では、調査・設計の段階からBIM/CIMを活用し、新技術導入を加速化させる「3次元情報活用モデル事業」として、取組を進めているところです。これからの建設業を支える新たな取組である建設分野のDX（デジタル・トランスフォーメーション）を活用し、業務そのものや組織、プロセス、建設業や国土交通省の文化・風土や働き方を変革し、安全・安心で豊かな生活を実現すべく進めてまいります。

建設コンサルタント業の皆様は、従来よりDXの取り組みを進められており、現状のインフラ分野のDXが始まった今が活躍の時なのではないでしょうか。

コンサルタント成果の出来上がりが、その後の業

務に大きく影響します。建設生産システムの大きな流れの中でコンサルタント業に求めるものは、上流段階としての役割です。企画・計画・設計から維持管理段階までの広範囲にわたっており、発注者のニーズに基づき、一貫した設計思想から、合理的（経済面、施工面、構造面、環境面、景観面、管理面など）となる検討も踏まえた良質な成果品が求められています。

設計者である建設コンサルタント業は、発注者のニーズを具体化し工事施工者に引き継ぐ受発注者の中間に位置しており、大事なキーパーソンを担ってもらっています。公共工事の施工では、現地一品受注生産であり現場の状況等を理解し、現場に適合する良質な成果品を設計することにより、下流段階の工事施工と施設管理等が円滑に進み、結果として優良な社会基盤施設を地域に提供することになります。建設コンサルタント業は、常に技術力を高め、計画や設計の質を高める最新技術を取得し、各段階に適合した常に高い水準の技術力の継続が重要と考えます。

そういう意味では、建設コンサルタント業の皆様には、先導的立場に立ち、建設業界の牽引役を期待します。

皆様の現場にあった成果品を作成するために、より良い作業（業務）環境を守るのは発注者であり、共に新しい取組を進めさせていただきたいと思います。

金沢城の史跡整備

～都心の歴史文化の交流拠点形成への取り組み～

石川県土木部 参与（公園担当） 丸山隆史

1. はじめに

戦後、金沢城跡に置かれた金沢大学城内キャンパスが郊外へ移転し、平成8年に県が跡地を112億円で取得し、都市公園事業に着手してから今年で25年を迎えた。

開園は、それから5年後の平成13（2001）年9月、「人と緑が織りなす文化のくにづくり～いま、金沢城址から～」をテーマとする全国都市緑化フェアの開催を機に行われ、「新世紀の幕開けの記念すべき年に開幕するお城フェア」との呼び声のもと、復元建造物第一号となった「菱櫓・五十間長屋」のお披露目を兼ねてのスタートであった。

そして、開園からちょうど20年後の今、入園者はコロナ禍のなか足踏み状態にあるが、北陸新幹線金沢開業後は年間約220万人を数えるなど、兼六園とともに国内外から多くの方々をお迎えする本県の歴史文化のシンボリックな交流拠点となっている。

都心のこの地は、ご案内のとおり、中世の一向宗、加賀前田家、陸軍第九師団、金沢大学といった各時代を象徴する歴々が座してきた本県の歴史を物語るシンボリックな場所であり、平成から令和の今の時代においては、公園という県民共有の新たな文化資産として、また、史跡金沢城跡の貴重な文化遺産として、将来に引き継ぐうえでの基盤が整えられたといえる。

ここでは、開園20年という節目にあたり、これまでの整備の歩みを振り返りながら、本県では例のない長期にわたる史跡整備の取り組み、そして、今後の展開について紹介したい。

2. 第1期「大学跡地の公園化」

平成7年2月に大学城内キャンパスの移転が全て完了し、都心の約23haの大きな空間は無人状態となり、主を失った跡地の整備は、大学校舎の解体と草木に覆われた石垣の樹木整理から始まった。最初に直面したのは自然保護関係者からの厳しい意見であり、今日、石垣の博物館と称される金沢城とは程遠い状況であった。整備は、城郭の区画（郭・曲輪）と豊かな緑を活かした総合公園としての基盤を整える一方、藩政期の城郭の風情が実

感できる公園を目指して整備を進めることになった。

ちなみに、明治の廃藩置県から平成までの約120年余りにわたり、現尾山神社の「金谷出丸」を除く城跡は、旧陸軍と国立大学のそれぞれ一者だけに利用されてきた。

このため、城跡は、他城で見られるような学校や球場、動物園等の用途に細分化されることなく、石垣と堀で区分された区画（郭）は往時のまま引き継がれ、この敷地条件を前提に整備を進めてきたことが今日、史跡としての価値を高めている要因となっている。

公園整備は、着手以来、県民の一日でも早い開放をとの要望に応えるべく、「全国都市緑化フェア」に続き、翌年はNHK大河ドラマ「利家とまつ」の放映に併せて「加賀百万石博」を開催し、藩政期以来、金沢城そのものが全国デビューすることとなった。

平成8年から10年に及んだ第1期での復元施設は、城内で最も高い櫓であった「菱櫓」と二の丸御殿の城壁でもあった「五十間長屋」「橋爪門続櫓」の他、内堀、土塀等である。



図1 右側から菱櫓・五十間長屋等（1期）と橋爪門（2期）

これらの一連の復元建造物により、多くの県民市民は白を基調とするツインタワーの櫓と細長い長屋からなる美しい城郭の姿を目の当たりにして、加賀前田家の大名文化による金沢城の価値と魅力を改めて認識するとともに、金沢城が身近な存在になったことに大きな意義があった。



図2 金沢城公園全景 (R2.10) -都市計画公園区域28.5ha-

県としては、初めての大型復元事業の取り組みにより、歴史的建造物の復元や史跡整備のノウハウを会得するとともに、次なる復元への様々な期待が寄せられるなか、今後の復元の在り方について合意形成を図るため、有識者からなる検討委員会を設置し、約2年にわたる県議会特別委員会での審議等を経て、「金沢城復元の基本方針」を定め、長期にわたる段階的整備の道筋を明らかにし、第2期整備へと繋げていくこととなった。

3. 第2期「新幹線開業に向けた復元整備」

平成17年度からの第2期整備は、第1期と同様、10年を事業期間とし、図らずも新幹線金沢開業がゴールとなる計画となった。

この間、公園として環境整備が整った平成20年には、当初より課題であった史跡「金沢城跡」の指定を受け、国家的な文化財としての保存と活用の取り組みが一層強化されることとなった。

整備は金沢城三御門の「河北門」と「橋爪門」、県庁跡地の整備と連動した「いもり堀」の復元、そして「玉泉院丸庭園」の再現、「大名庭園の灯りの絵巻」と称する和楽の調べとともに変化するライトアップ等を着実に進め、新幹線開業1週間前までに全ての事業を終えた。

とりわけ、玉泉院丸庭園は、兼六園より40年余り前の



図3 公園平面図 (出入口)

江戸前期に作庭が始まり、幕末まで存在した「芸術的な石垣群を構成要素とする立体的で独創的な池泉回遊式庭園」と評される城内庭園の再現であり、藩主の庭としての変遷が加賀前田家の文化政策の一端を物語っているだけに、ストーリー性のある観光資源として魅力的な存在となっている。

この一連の復元事業の取り組みにより、歴史的には本家である「城」が、特別名勝として高い観光ブランド力を誇る城の外庭であった「兼六園」に追いつき、城と庭の二つの顔をもつ歴史文化の交流拠点が確立されたといえる。

4. 第3期「金沢城の輪郭の形成・回遊性の向上」

新幹線開業後、国内外から多くのお客様をお迎えするなか、引き続き、史跡金沢城の価値と利用環境の向上を図るため、平成27年度から第3期事業に取り組むこととなった。

事業は「鼠多門・鼠多門橋」の復元整備の他、増加する入園者のおもてなし向上を図るための「鶴の丸休憩館」一帯の整備、そして、史跡金沢城を特徴づける「石垣の保全対策」の継続的な取り組みである。

メイン事業の「鼠多門・橋」は、東京五輪開会までの完成を目指して着工し、五輪は1年延期されたもののコロナ禍の中、予定通り供用を開始した。

後述するが、この門と橋の整備は、遺構保護対策などの課題が多く、文化庁等の関係機関との協議調整に時間を要したが、設計コンサルタントや施工関係者の皆様による工夫が重ねられ、計画どおり完成に至ったものである。

また、本事業は、これまでの城内部での整備ではなく、中心市街地に面する外周部での復元整備であり、歴史都市「金沢」の景観形成に寄与するとともに、兼六園を中心とする「文化の森」の背骨ともいえる回遊軸が形成され、長町の武家屋敷群から城と庭を經由し、昨年開館した国立工芸館の本多の森を結ぶ「加賀百万石回遊ルート」としてご利用いただいている。

四半世紀に及ぶ公園整備も第2期の玉泉院丸庭園と第3期の鼠多門・橋の整備により、金沢城全体の輪郭が整い、藩政期からの城下町金沢のシンボルとして、より一層求心力が高まったものと受け止めている。

5. 歴史的建造物の復元とは

ところで、史跡での歴史的建造物の復元とはどのようなもので手順はどうなっているのか、少し触れたい。

「史跡」とは、文化財保護法において、「名勝」や「天然記念物」と並ぶ我が国の歴史上又は学術上の価値が高く重要とされる「記念物」の一つである。

復元整備による現状変更は文化庁長官の許可を要し、復元建造物については、文化庁の復元専門委員会での審査を通過したものが許可される仕組みとなっている。

その審査基準の冒頭には、歴史的建造物の復元とは「今は無いが、史跡の本質的価値を構成する要素として、遺構に基づき、当時の規模・構造・形式により、原位置において往時の姿で再建する行為」と定義され、整備にあたっては「遺構を損傷させないこと」と「当該史跡の本質的価値の理解を妨げないこと」を前提に、「復元建造物の遺構の位置・規模・構造・形式等について十分な根拠があり、復元後の建造物が高い蓋然性を持つこと」とされている。

具体的には、発掘による遺構確認をはじめ、絵図面、来歴や建造の記録、古写真や絵画等の史資料の確認と様々な検証により根拠を固めていくこととなる。それでも判明しない内部の意匠や細部の仕様等については、現存する同時代の類似の建造物、例えば、金沢城では石川門や三十間長屋が該当するが、他城の事例も含めて検討することになる。

なお、こうした作業を経て復元された建造物の史跡での位置づけは、今は存在しない建造物の「復元展示」に



図4 玉泉院丸庭園(休憩・茶室)(2期)と鼠多門(3期)

該当し、遺構を舗装や縁石等で地表面に表示する「野外展示（遺構表示）」に対して、実物大模型（レプリカ）とも呼ばれる展示手法の一つとされる。

また、対象となる時代によってその扱いは異なり、幕末まで存在した近世の城郭については、古写真も存在することもあり、「極めて精度高く復元することが可能であること」が許可要件となる。

近世以前のものについては、発掘遺構を前提に、対象建造物の史資料がかなり限定的であっても同時代の類似建造物の史資料により復元されている事例は多く、当該史跡の理解を深めるうえでの有用性の程度が判断の目安なのであろう。

金沢城においても史跡指定以降は、史跡における復元基準による審査を経て、現状変更許可を得て工事を進めているが、取り組み事例として、遺構保護対策などの課題が多かった「鼠多門・鼠多門橋」について紹介する。

6. 復元事例「鼠多門・鼠多門橋」

この門と橋は、金沢城の西側の区画（郭）である「玉泉院丸」の一角に位置し、いもり堀跡の現市道を挟んで、現在の尾山神社境内である「金谷出丸」との出入口となる門であり、両区画（廓）を結ぶ橋である。

「玉泉院丸」の東側上部の「二の丸」には、藩主が住まいした二の丸御殿があり、反対の西側の「金谷出丸」には前藩主や子女たちが住まいした金谷御殿が置かれており、藩主らが本邸と別邸を行き来する際に利用した門と橋でもある。

ちなみに「金谷出丸」は堀を挟んで西側に張り出した区画（郭）であり、今の我々が藩政期の金沢城の全体像を理解するうえで重要な役割を持つ門と橋でもある。

しかも、鼠多門は明治以降、旧陸軍が入口を石積みで塞いだため、これまで藩政期の城の出入口の中で唯一閉ざされていたが、今回の復元により通行が可能となり、歴史的ルートの復活を果たすという意味も込められている。

石垣の間に通路を設けた櫓門形式の門であり、他の門と同様、屋根は鉛瓦、外壁は白漆喰塗りで腰壁には海鼠壁が用いられているが、この門だけは、海鼠壁の目地が白ではなく黒色の漆喰で仕上げられているのが大きな特徴となっている。

以下、この復元整備において、史跡整備上、直面した主な課題や対応について紹介する。

まず、史資料については、明治10年に橋が撤去されるまでの間に撮影された古写真が存在しており、何よりも有力な史料となった。

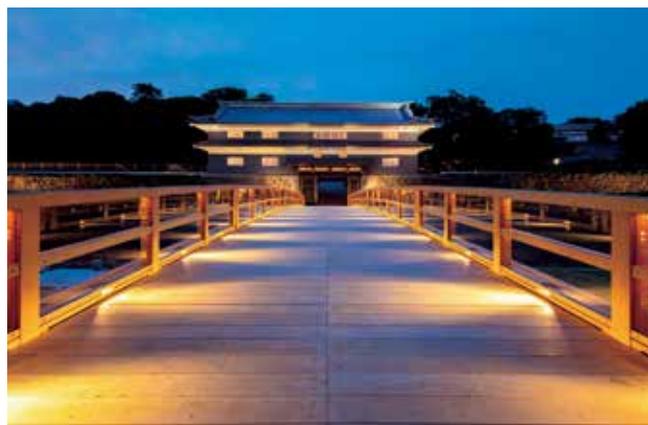


図5 鼠多門・鼠多門橋のライトアップ（3期）

一方、この門と橋を個別に描いた詳細な絵図面は確認されず、城内全体を描いた複数の絵図に頼ることとなった。幸い、城の全体図といえども大柱の配置や外郭寸法、橋の幅員と延長は記載されており、最小限の情報は得ることはできた。

詳細な絵図が確認できない理由は、門の創建が江戸前期とされ、城内の多くの建物が焼失した二度の大火でも焼失せず、旧陸軍時代の明治17年に焼失するまで250年近く、存在した大変長寿の門であったことにある。城内でこの門だけが黒色の漆喰仕上げとなるのもこの理由とされる。

ちなみに、二の丸御殿などは度重なる火災でその都度再建されているため、確認される詳細な平面図は約80枚にもものぼる。

このように絵図・文献の史資料は限定的ではあったが、古写真とともに発掘調査結果が最大の拠り所となった。

4年に及んだ発掘調査により、旧陸軍が埋め立てた通路の両側石垣をはじめ、建物の外郭線や大柱の礎石や柱の太さも確認でき、明治以降は旧陸軍の監獄署の倉庫として利用されていた門の遺構の残存状況は良好であったが、当初より危惧されたのが、江戸期の石垣遺構の間に通路を再現し、その石垣上部に二階建ての櫓門を建設することであった。

先述したように、復元整備にあたっては遺構保護が大前提であり、復元のために江戸期の石垣遺構を改変し補強することなどは本末転倒ということになる。

また、門の基礎建造物の設置にあたっては、同様に良好に残っていた遺構の保護が求められる。

橋については、当初の堀底高さや数度にわたる橋脚の取り換えによる木柱の痕跡が複数確認され、絵図と古写真との照合により、往時の姿はほぼ解明されたが、こちらは堀の遺構面の保護が課題となった。

当初、堀の遺構面は往時の堀底と考えていたが、調査の結果、堀の廃絶時の堀底、すなわち、約二百年以上にわたって堆積した軟弱な層が保護すべき遺構面とされ、橋上部の構造や意匠もさることながら下部の基礎構造も遺構保護の制約条件での検討が求められた。

これらの対応の詳細は割愛するが、門では、通路部の柱の礎石遺構が受ける荷重を軽減するため、ケヤキ大断面の梁材にT型鋼材を埋め込み、梁そのもので荷重を受ける等の対策を講じている。高価な梁材の加工となり、本物志向の姿勢で伝統的な木造軸組工法での城づくりに携わってきた方々にとっては、複雑な想いで施工であったと思われる。

また、橋については、遺構面より上部の限られた地下断面での構造検討の結果、支持地盤まで到達する杭を打たず、基礎コンクリート盤と橋脚・鋼床版を一体的に剛結し、橋梁というよりはボックスカルバートのような構造でカバーすることとなった。

門は、史実に沿った木造による復元を行う一方で、市道を跨ぐことになる橋については、先述の遺構の保護対策のほか、道路機能維持や安全基準の確保のため、最終的には鋼構造とし、橋脚の位置や桁高については往時とは異なる形となっている。意匠については、史実に沿って復元する鼠多門や現存する江戸期の石垣との調和を図るため、敷板や高欄は全て木製とし、橋脚・床版等の鋼材部については、能登ヒバ(アテ)の板材で覆うこととした。

一見、往時の木橋かと思える出来栄えとなっているが、こうした手法については異論もある。

史実に沿った復元が求められるといえども、耐震性や安全性の確保は不可欠であり、文化庁や専門家の間でも史実と異なることは止むを得ないとされる。しかし、往時には無かったバリアフリー設備等の新たな機能を付加する場合、または、整備の必要性は認められるものの往時の姿と主要部が異なることになる場合は、往時との違いを明確にするため、現代的な仕様にすべきであり、鼠多門橋の仕上げ方は、誤解を与えることになるのではとの意見である。

金沢城では復元建物内外でのバリアフリー設備や休憩所やトイレ等の公園施設の意匠デザインはこの考えに沿った整備を行ってきているが、今回のケースは、様々な選択肢を検討するなかで、最終的には、門・橋・石垣の三点セットによる歴史的景観(風情)の再現を優先する観点での判断であった。

今後も、対象施設の特性に応じて、十分な検討と説明が求められる課題である。



図6 鼠多門・鼠多門橋(3期)、回遊アプリのARでの水堀再現

7. 金沢城の史跡整備の特性

四半世紀に及ぶ史跡金沢城跡の保全と活用に取り組みを進めてきた結果、全国的な城郭整備において金沢城の特性と思われる点をまとめてみたい。

一点目は、長年にわたって計画的かつ継続的に実施されていることである。城郭の大規模復元が継続的に実施されている例としては、伊予松山城、被災前からの熊本城と首里城、そして金沢城のようである。

ちなみに金沢城では、ほぼ5年おきに大型の木造建造物の復元の他、石川門の大規模修理を実施しており、これまでの復元棟数は6棟、延床面積約2,600㎡、使用木材量約2,500㎡、標準的な木造住宅に換算すると約百棟に相当する規模である。

これらの復元整備にあたっては、菱櫓等の建設時に結成された関係9団体による「石川の伝統的建造技術を伝える会」により、長年にわたって培われてきた伝統技術が発揮されており、金沢城の復元事業は、伝統的建造技術の実践、研鑽、そして継承の場として重要な役割を担っている。

二点目は、古写真は少ないものの、史実の解明に際しての材料は恵まれていることである。

前田家に由来する数多くの絵図文献の史資料が残されていることをはじめ、多様な石垣が良好に残され、使用された戸室石が現在でも供給されていること、また、明治以降、地下遺構の破壊につながる大規模な地形改変がなされていないことなどである。

そして、三点目、全国の城郭にあって特筆されるのが平成13年に設置され、公園の開園と同様に今年で20年を迎えた県金沢城調査研究所の存在である。

考古、文献など約20名の専門職員からなり、園内の発掘調査はもとより、石垣や庭園の調査研究と保全対策の検討など、金沢城に関する学術的な調査研究の累積は、史跡の整備活用を効果的かつ重点的に進めるうえでは

不可欠であり、調査研究と公園整備が車の両輪となって金沢城の保存と活用が推進されている。

8. 今後の展開「二の丸御殿の復元」

これまでの公園整備について紹介したが、最後に現在の取り組み状況と今後の展開について触れたい。

金沢城の復元に関してよく話題となってきたのが「二の丸御殿」である。城内最大規模の中樞をなす建物であり、門や櫓と異なり豪華で華麗な内装を設えていた加賀百万石の栄華を象徴する建物であったことが判明している。そのため、かねてより復元への関心が高く、県としても金沢城の歴史文化を物語る究極の建物として、金沢城調査研究所が長年にわたって調査研究を重ねてきた結果、御殿の様相も相当明らかになってきたことから、平成30年に専門家による御殿復元調査検討委員会を設け、復元の可能性について具体的に検討を行った。

検討過程では、江戸後期の御殿再建時の内外装の仕様を詳細に記した史料が確認されるなど、新たな知見を得ることができ、昨年2月には「儀礼や政務の場であった「表向」の復元整備は進めることは可能」との、最終報告を受けた。

この報告を受け、昨年度、本格的な発掘調査に着手するとともに、「復元整備に向けた基本方針」を策定し、今年度は、土木部内に美術史・歴史分野の学芸員も参画する部局横断の復元整備推進室を設け、御殿の顔ともいえ

る玄関や式台の周辺部を対象とする基本設計に着手することとなった。

先の復元の可能性の調査検討に入る際、相談した専門家の方から「金沢城の県の長年の取り組みは大変評価される。しかし、言葉は悪いが、門や櫓、堀、庭園は城の外構整備といえるもの。金沢城の歴史・文化を語り、極めるためには、中樞であった御殿に焦点を当てた調査研究や御殿復元も視野に入れた活用策に取り組む段階にきているのでは」との助言を頂いた。

確かに、二の丸御殿の機能や役割に応じた建物構成、造作、装飾の数々など、御殿の復元は、これまでの門や櫓とは比較にならないほど、様々な分野からのアプローチが必要であり、調査研究・設計施工・利活用へと進む各場面において、多様な効果をもたらすことが想定され、御殿の復元により、金沢城を総合する大きな「受け皿」が新たに誕生することになるといえる。

県では、二の丸御殿の復元は金沢城の価値と魅力を格段に高めるとともに、都心の風格と本県の個性である質の高い文化に厚みを加えるものとして、復元事業を推進することとしており、四半世紀を経た金沢城整備の終盤の幕が開いたといえる。

コロナ下の行動制限緩和の折には、文化の香り漂う秋の一日、令和の「鼠多門橋」から城に入り、御殿跡の二の丸を経て、昭和の「石川橋」を渡り、兼六園・本多の森（国立工芸館）へと歴史文化の都心の回遊を楽しんで頂ければ幸いです。

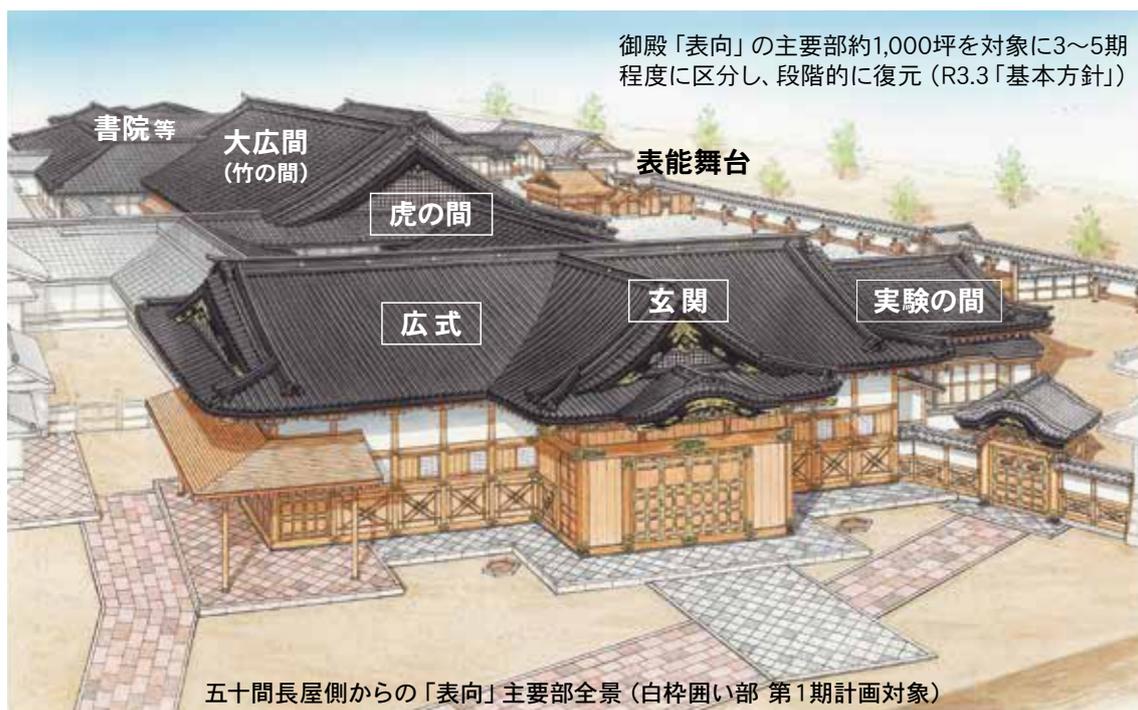


図7 二の丸御殿復元整備イメージ

華やかなりし出雲崎の記憶

出雲崎妻入りの街並み景観推進協議会 磯部友記雄

1. はじめに

わが出雲崎町は新潟県の長い海岸線のほぼ中央に位置し、越佐海峡を挟んで佐渡島を臨む位置にあります。出雲崎町は古くから対岸の佐渡島と深い関係にあり、多くの伝説や交流の記録が残されています。

伝説では、古代の人々が佐渡へ渡るために出雲崎で大きな木を探し船を造った事や、和漢三才図会（正徳2（1712）年）には「出雲崎小木間海上十八里と算ふ」と記されています。

承久3（1221）年5月に発生した承久の乱に敗れた順徳上皇は、佐渡へ配流となり出雲崎で船待ちをしました。しかし海が時化続きのため、佐渡に近い寺泊へ行かれてから渡られた、と伝えられています。また、正中2（1324）年には正中の変が発覚し、首謀者として日野資朝が佐渡へ流されました。配流の途次、出雲崎の山本家（のちの良寛の生家）で休まれ和歌を詠まれました。

忘るなよ 程は波路を へだつとも
替わらず匂へ 宿の橋

以後、山本家は家号を「橋屋」と称し、明治20（1887）年12月27日、烏丸光亨伯爵から日野家と縁があることの記念として朱盃2組が贈られています。この橋屋に宝暦8（1758）年、山本栄蔵、のちの良寛が生誕したのであります。



良寛生誕地橋屋跡

2. 上杉時代から徳川時代の出雲崎

永禄5（1562）年上杉謙信は出雲崎に貯産所を設け、佐渡攻めの拠点としました。以降数度に渡り佐渡へ出陣し、謙信死去後は上杉景勝によって天正17（1589）年によく佐渡を平定したのです。なぜ謙信が佐渡を治めんとしたのかは、平安時代から佐渡で砂金が産出されていることが伝えられており、その砂金を手中に取めんとしたものと考えられます。

慶長3（1598）年豊臣秀吉によって、上杉景勝は所領を没収され、会津への移封を命じられます。越後を堀秀治に領治させ、代官に赤羽庄左衛門が就任、大久保長安を佐渡へ派遣しました。長安は尼瀬（現在の養泉寺がある稲荷町山側）に足軽町を建設し、出雲崎を佐渡渡海の津（港）と定めたのです。そして、この町に旅籠屋・下女・飯盛り女を公認しています。慶長4（1599）年以降、各地から農業を捨て一攫千金の夢を見んと多くの農民が佐渡へ行きました。そのため慶長7（1602）年には佐渡出稼を強く規制する文書が出されています。

慶長6（1601）年相川で鉾山が発見され、佐渡の奉行所が相川へ移動しています。佐渡で採掘された金銀は塊のまま江戸へ送られ小判に鑄造され、これが「慶長小判」といわれています。幕末の慶応2（1866）年まで、佐渡で採掘された金銀は江戸へ運ばれました。

出雲崎に町建てが始まる

慶長8（1603）年佐渡奉行となった大久保長安が尼瀬に足軽長屋を建て佐渡鉾山が繁栄すると、佐渡との物流が多くなりました。それに伴い出雲崎で商売をしようと大勢の人々が移り住み、狭い土地を有効活用するため、狭い間口の家屋や長屋を建てて住むようになりました。

もう一つの要因として、江戸幕府の政治を強固なものにするべく、全国の諸大名の政治経済の状況をしっかりと把握するために、大名領に派遣する「諸国巡見使」と天領地に派遣する「御領巡見使」があったのです。寛永10（1633）年より始まり、天和元（1681）年には全国を八分して実施されました。

諸国巡見使には各々に使番、小姓組、書院番の3人組編成が、御領巡見使は勘定、支配勘定、徒目付が派遣されておりました。2月、巡見使の下向の布令が発表されると、高田・長岡・新発田の三藩から郡奉行がそれぞれ20～30人の下役を伴い出雲崎へ出張します。出雲崎では直ちに巡見使の宿となる本陣を3軒選び、宿の設備の普請を始めます。御召船3艘は新造し、御供船・御馳走船6艘は地元の小廻船を借り入れて対応しておりました。当初は9艘全部を新造しておりましたが、費用が多額なために御召船3艘だけを新造しました。御召船の造船小屋には御用の高札が建てられ、多くの備品が請負入れされました。御供船・御馳走船・小早船3艘の借り入れ、船頭水主120人、増水主130人の雇入れが入札で定まり約3ヶ月掛けて準備を整えました。

高田・長岡・新発田の家老格が勘定方、賄掛り、医者、座頭、茶坊主の果てまでそれぞれ40～50人程を引き連れて町を訪れ、新造船等12艘の勢揃試運転が行われます。巡見使来町当日は三藩の御馳走係、出雲崎代官所詰役人、出雲崎尼瀬の名主、年寄、船頭役（廻船業者の元締めで出雲崎港の出入船の確認や、商品の輸出入等を記録して代官所への提出等を担う）、問屋等数百人がそれぞれ正装して町境に並んで巡見使を出迎えたのです。

巡見使の様子

露払いの杖突2人を先頭に具足1櫃^{ひつ}、鉄箱2肩、長持3棹、荷物20個、御茶弁当、合羽掛、御駕籠2挺等の一番乗りの行列がやって来て、第二番、第三番と同じ程度の道具を持参して来ました。これにより総勢100人前後、人馬60匹余り、人足200人からの大行列となりました。案内人として〇〇様道筋御案内役・紺屋弥助、二番〇〇様道筋御案内役・後藤屋次左エ門、三番〇〇様道筋御案内役・米屋十兵衛、荷物御道具見届役・山城屋源七らがそれぞれ本陣旅館へ案内します。

本陣の座敷は、「御上段床間は掛物計、熨斗^{ぼかり}と米を三宝に載せ、献立料理は一汁一菜外無用、御酒は吟味有之堅く停止上下にも無用」との事。膳部は「御上様御膳御持参、用人以下は宿の物を用ゆ、夜具も同様…」との事があります。これは表面上の規則で、「三藩の御馳走は又格別と御承知ありたり」。

当夜は本陣前に各一ヶ所、町はずれにも一ヶ所ずつ都合五ヶ所の番所を設け、御逗留中は「寺社共に人寄無用、火の番初め警備おさおさ怠りなく」。大勢の人々のために売店を2軒設け、米は一升五文安^{もんやす}、草履^{そうり}・草鞋^{わらじ}は一文ま

け、その他のいずれも少しずつ安売りの便宜をはかり、三藩出役者に対しても家老方1人200文、下々は150文と宿料を定めています。

やがて巡見使より、名主町役人に対し町勢一般を下問されます。戸数、人口男女別、社寺宗門別、公租地の石高、船溜個所、廻船数、漁船数、官庁、名所旧跡、古城址、金銀鉱山の有無、貿易先の国名、各国道都への里程、酒造家の戸数、小売物価や駄馬問屋の軒数まで微細に亘って具答申書を差し上げます。

2、3日船待ちに逗留し、いよいよ上景気の日和を見定め出航の朝となります。三藩の馳走役残らず町年寄不残袴^{ふなどう}、船道問屋衆は羽織袴で浜辺へ見送りに出ます。先例によって波打ち際の海中三ヶ所に土俵を築出し、3艘の舳^{はしけ}に長板をかけ渡し、元船へと漕ぎ出します。

大潤の内には、御召船・御馳走船各3艘ずつ、その他に伝令を務める小早船3艘の計12艘が、満船飾の旗で美しく飾り、御召船は3艘とも40挺櫓の水夫一同、揃いの紺の単衣に浅黄の腰帯、御供船・御馳走船は18挺櫓、16挺櫓の櫓束を掴んで待ち構えております。御召船を先頭に御供船の紅白黒の旗印が進み、潤の口の暗礁の所に50艘の漁船が正列して岩添えに立ち並び奉送します。

12艘とも潤の外に出ると御召船から早網が投げられ、50艘の漁船が投網を曳きつつ御船歌を合唱します。波のうねり櫓拍子に合わせて船歌の合唱の中、沖へ曳かれて行きます。2、3里沖へ進むと高田の御馳走船から、大坂の陣で用いられた陣太鼓が打ち鳴らされ、貝が吹かれます。二番長岡の御馳走船からも竹の貝が吹かれ、三番新発田の御馳走船からは謡曲があり、順番の余興の中、土瓶酒に重箱の肴が出、赤飯がお供衆に配られ、紙包みのお菓子が運ばれます。

18里の海上では、このように歓楽のうちに小木港へ到着します。佐渡島内巡視は大体7日間で、風雨の船待ちがない限り10日程で再びこの大騒ぎを繰り返し、出雲崎へ帰られたのです。

この巡見使派遣で新造される3艘の御召船は三藩の手で入札、それぞれ安々と払い下げを受け、出雲崎の廻船業の発展に繋がりました。

3. 江戸幕府を支えた佐渡金山

上杉謙信は永禄8(1565)年以降数度佐渡へ出陣し、佐渡本間一族は降伏、これにより佐渡で産出する金を手中に収めました。

慶長3年豊臣秀吉が佐渡に金銀の出ることを知ると、

上杉景勝に会津への移封を命じました。堀秀治が越後を治めるようになると、大久保長安(石見守)が初代佐渡奉行となり、出雲崎を訪れました。出雲崎を拠点として、尼瀬地区に茶屋、足軽長屋が建てられ、旅籠が出来、遊郭が許可され大変発展しました。天正4(1576)年の御水帳によると、尼瀬・出雲崎両町で300軒の町家があったのが、佐渡との渡海の港が整備されると15年程で尼瀬だけで180軒余りとなり、大変な町並みの変化となりました。

慶長4年佐渡鉱山は活気を帯び、鉱山労働者が不足してきました。越後国(新潟県)では10貫目、能州(石川県)では堀り子1人につき5貫目。越中(富山県)では「百姓等田植も打捨て金ほりに渡る事一切停止する事」等のお触れが出されています。これは金掘りのため佐渡へ渡ることを禁じています。3年後の慶長7年12月7日にも、前田利長によって「当国中町人百姓其外如何様之者によらず他国之金山之相越事今堅停止訖者法度之旨に背き相越輩に於ては聞次第其第一類 悉 可成敗者也」と領内の百姓、町人へお触れが出されていますが、越後をはじめ越中、越前などからおおよそ十万人以上が佐渡へ渡っております。

慶長6年相川鉱山の開掘りが始まり、同9(1670)年大久保長安が佐渡へ渡り、陣屋も鶴子から相川へ移転しております。

大久保長安の生い立ち

大久保長安は、甲州(山梨県)の猿楽師の子で武田の家臣となりますが、武田が滅亡したため駿河におもむき、「大蔵太夫」と称し徳川家康に猿楽師として仕えました。のちに金掘師に任じられ、金銀山開発にあたり、佐渡・石見などの鉱山開発の功績により大久保姓を賜りました。慶長初年に従五位下石見守となり、武蔵(東京)八王子に3万石を拝領しました。慶長8(1603)年石見銀山兼佐渡金山奉行に、同11(1606)年伊豆銀山奉行となります。

全国の鉱山を管轄する一方、慶長6年東海、東山、北陸の三街道に一里塚を設置し各地方の検地を実施、同13(1608)年には江戸城における浄土、法華の宗論を奉行、また、築城にも参画するなど多方面にその才能を発揮しました。しかし大久保の死後、生前に不正があったと言われ家族は切腹となっています。

慶長9年4月10日大久保長安は佐渡国松ヶ崎へ着岸し相川へ行き各地を巡見、佐渡島内を視察し、同年8月

10日伏見(京都)へ戻り佐渡金山の状況をつぶさに報告しております。その内容は、「今後益々金銀が発掘される」としております。

金銀の輸送

佐渡小木湊で船積みされた金銀(御金荷)は出雲崎湊に陸揚げされると、砂浜で数量などに間違いがないか確認後、御金蔵へ納められ、2、3日後に宿継ぎで江戸へ送られました。

宝永3(1706)年3月15日、御金荷86箱が入港。約80箱が10貫入り、6箱は7貫5匁入りで、これを佐渡からの御金荷宰領、出雲崎代官所役人、出雲崎・尼瀬両町名主の立ち合いのもと、金の入った箱の数を確認しました。金は御金蔵に入れられ、両町名主相判で蔵を封印し、蔵の鍵は尼瀬名主が預かりました。

御金荷を入れた蔵の警備は非常に厳重なものでした。出雲崎での資料は残っていませんが、他の継走宿の史料によると、夜間御金蔵の周りを警固者数十人が巡回、それと別に町内の見廻り組や防火組が設けられ、多くの町民が警備に携わりました。

江戸までの公道は3路あり、北国街道は距離が長いが険路は少なく、宿駅制度も整っていて最も安全でした。佐渡産の金は江戸時代から幕末まで、毎年江戸へ送られており、寛延4(1751)年4月の高田の地震で、高田・善光寺ルートを取りやめ、三国峠越えで運ばれた以外は全て北国街道が利用されています。

御金荷は、幕府老中が発給する御証文によって継送りがされており、宿では他の予定を変えて必要な人馬を用意しなければなりません。この継送りでは10日間程で江戸へ送られています。また、御金荷を江戸へ届けた役人達は江戸から佐渡へ帰る際に、佐渡へ遣わされる金・銀・お金を佐渡へ送り届ける任も担っていました。

4. 文人の往来

出雲崎には松尾芭蕉を代表とする多くの俳人、五適杜澗や亀田鵬斎などの詩・歌・書・画などに優れた諸国の文人が来訪しております。そして、出雲崎といえば代表されるのが「良寛さん」であり、良寛の生まれた町に多くの文人墨客を迎え入れたのは、出雲崎の人の心の広さと、受け入れられる経済的なゆとりがあったからです。

松尾芭蕉の来町以降、「荒海や 佐渡によこたふ 天の河」が詠まれたこの町に多くの俳人、画家が訪れております。芭蕉は『おくのほそ道』紀行ののちに「銀河の序」を

残しており、芭蕉が泊まったとされる大崎屋の向かいの敦賀屋屋敷跡（芭蕉園）に銀河の序碑が建立されております。

佐渡奉行の往来や金銀の輸送、巡見使の来町など、多くの人達がこの地を訪れており、それらの接待に多額の費用は出雲崎町に潤いを与えてきました。

5. 妻入りの街並み保存の悩み

江戸幕府が開かれると同時に佐渡金山の開発も盛んになり、江戸初期は多くの職業の人々が出雲崎へと流入してきました。人口の増加に対応するため、狭い土地でも大勢が住めるよう間口が狭く、奥行きのある長屋が建てられました。

江戸中期頃からは尼瀬町で廻船業を営む人が増え、出雲崎では旅籠や遊郭が多くなり、漁業関係者が多く住むようになりました。その街並みの景観は、江戸時代から現在まで大きく変わることなく連綿と続いております。

昭和46（1971）年、新潟県による緊急社寺調査が実施され、東京大学の教授が出雲崎を訪れました。街並みを見渡せる所へ案内すると、教授は10分程町を眺めて一言、「こんな素晴らしい街並みが日本に残っているのか」。出雲崎に一泊し、地元の人と交流したいとおっしゃるので、早速4名の方に声をかけ、翌日午前2時頃まで町の歴史や街並みについて話をしました。

その後4名と私とで話し合いを重ね、「街並研究会」として地域の方に「妻入りの街」の学習会を実施し、「出雲崎妻入りの会」を設立しました。学習会には建築の専門家や大学教授などを招いて、街並み保存の大切さを認識してもらいました。また、東京藝術大学の日本画の院生を招き、街並みのスケッチ画を描き残してもらいました。この取り組みは現在も続いており、多くのスケッチ画が残されております。

目下の悩みは住民の高齢化と、家屋がどんどん壊され消えていくことです。現在は「街並み景観推進協議会」を組織して、街並み保存を地域の方へ呼びかけております。



妻入りの街並み

美人の湯 月岡温泉がある 城下町新発田市

(株)新潟トラベル 常務取締役 山崎康裕

新型コロナウイルスの影響により、団体旅行や忘年会などを大々的に行うには難しい状況が続きます。少人数で！知り合いのみで！移動も食事も観光も密にならないで！旅行をお楽しみください。

ワクチン接種（希望者）は、万が一感染しても重症化しないと言われています。ワクチン接種も旅行復活の1つの手段だと思えます。（私は2回接種済みです）

月岡温泉

新潟県にお住まいの方は、もちろんご存知だと思いますが、他府県の方でも新潟県の温泉と言えば「月岡温泉」とお答えになる方が多いと思います。新潟県を代表する温泉地です。



月岡温泉は、エメラルドグリーンの色をした硫黄泉です。皮膚への刺激が少なく、入浴後には肌がしっとりす

る保湿効果も期待できます。アトピー性皮膚炎、慢性湿疹などに効果があると言われております。

近年、温泉が整備され温泉街をブラブラしながら新潟の銘酒を試飲したり、新潟産の干物などを試食できるお店や、煎餅の手焼き体験などが出来るお店も増えて来ました。



月岡温泉「月あかりの庭」

温泉街だけでも充実していますが、月岡温泉の住所は「新潟県新発田市月岡温泉」です。月岡温泉の知名度は高いのですが、新発田（しばた）市の観光地を知らない方が意外に多くいらっしゃいます。月岡温泉にお泊りの際は、新発田市の観光も合わせてお楽しみください。

新発田市の歴史

新発田市は、新発田藩の城下町として栄え、新発田城をはじめとする歴史的な建造物が多く残っております。



新発田城と桜

新発田市の歴史は、1598年より幕末まで溝口家が治め、城下町として発展してきました。その後、廃藩置県により新発田県となりましたが、すぐに新潟県に編入されました。

明治より陸軍歩兵連隊が置かれ、終戦まで軍隊の街として発展しました。現在は、陸上自衛隊新発田駐屯地となっております。このように城下町から軍隊の街へ変わって行きましたが、時代毎の歴史的建造物などは修理、復元され、現在に至っております。

新発田市の産業

新発田市は交通の利便性もよく、様々な有名企業の工場が稼働しております。米どころでもあるため、全国的に有名な日本酒の蔵元もあります。

ほかに、渋沢栄一と同時代を生き抜き、鹿鳴館や帝国ホテル、サッポロビール等の設立に関わった実業家「大倉喜八郎」、江戸時代の元禄期赤穂四十七士の「堀部安兵衛」の生まれた地としても有名です。

新発田観光

城下町として栄えた新発田市は、新発田城（表門と旧二の丸隅櫓は国の重要文化財）に代表される建造物が多くあります。新発田城、新発田藩下屋敷「清水園」（国指定名勝）、足軽長屋（国の重要文化財）、赤穂浪士「堀部安兵衛」の墓がある長徳寺、越後の豪農「市島邸」などが有名です。明治以降の物としては、白壁兵舎（陸軍時代の兵舎を復元）、新発田カトリック教会、旧県知事公舎記念館など、多くの観光地が点在しております。

また、日本一小さな山脈として有名な「櫛形（くしがた）山脈」もあります。三山から構成されている13.5kmの山脈です。手軽な山脈制覇はいかがでしょうか？



回遊式庭園の清水園



当時の姿のまま残る足軽長屋



堀部安兵衛の墓がある長徳寺



復元された白壁兵舎

交通手段

現在はコロナ禍のため、移動が制限されていますが、自動車を利用すれば高速道路の聖籠新発田ICから新発田市に向えます。電車の場合はJRの白新線を利用し新発田駅で降車、または新潟駅から観光タクシーを利用して、新発田市内観光後に月岡温泉へ向かうという方法もあります。

観光地も宿泊施設も新型コロナの対策を施し、皆様のお越しをお待ち致しております。詳しくは「しばた観光ガイド」(shibata-info.jp)をどうぞ。

「白山外来植物除去作業 in 市ノ瀬」 開催報告

〈技術部会 建設環境委員会・広報部会 広報委員会〉

1. はじめに

近年、白山国立公園では外来植物であるオオバコ（外来植物）の侵入が管理上の課題となっています。そこで、令和3年6月27日（日）に「白山外来植物除去作業 in 市ノ瀬」と題した除去作業を石川県及びNPO法人環白山保護利用管理協会との共催で開催しました。

当日の天気は小雨が降ったり止んだりしましたが、石川県内の協会員及びその家族が33名、その他一般が40名の計73名の参加があり、雨にも負けず熱心にオオバコの除去作業を行いました。

2. プログラム

- 1) 場所：白山 市ノ瀬ビジターセンター周辺
- 2) 日時：令和3年6月27日（日） 13:00～16:00
- 3) 参加：石川県内の協会員及びその家族33名
一般40名
- 4) 内容
 - ①講義：白山におけるオオバコの影響と対策
 - ②体験：オオバコ除去作業

3. 講義概要

まず、白山における外来植物オオバコの影響と対策について講義を行いました。講義内容は次のとおりです。

（1）オオバコ（外来植物）による影響

白山は「花の白山」とも呼ばれ、約250種の高山植物が生育し、その内の約100種が白山を西限としています。その一つである在来のハクサンオオバコは、本来生育していない低地性のオオバコ（外来植物）の侵入により、その生育が脅かされています。更に問題となるのが、低地性のオオバコと高山植物である在来のハクサンオオバコとの雑種が生まれ、遺伝的多様性に影響を与えることです。また、低地性のオオバコ（外来植物）の侵入は、高山植物の生育場所を奪うこととなり、美しい高山植物の風景を損なうなど、景観の悪化にもつながっています。



自然豊かな白山（南竜ヶ馬場）



講義の様子



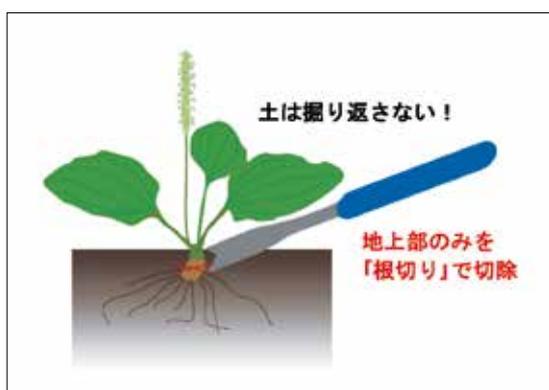
在来のハクサンオオバコ（高山植物）

石川県白山自然保護センターが実施した調査によると、標高2,000メートル以上の南竜ヶ馬場や室堂周辺にまで低地性のオオバコ（外来植物）が侵入しているとのこと。これらは、登山者の靴や荷物、ヘリコプターによって運搬された資材などに付着した種によって持ち込まれ、発芽し定着したと考えられています。

なお、オオバコの種は厄介なことに濡れると粘液を出すため、靴やタイヤなどに貼り付きやすくなります。

（２）対策

低地性のオオバコ（外来植物）の種が拡散するのを防ぐためには早急に駆除することが必要となります。このため、白山の登山口となる白山の市ノ瀬駐車場では、毎年、オオバコの除去作業を実施しています。除去方法には特徴があり、「根切り」という道具を用いて、地上部のみを切除します。この除去方法は、山岳地において貴重な土壌を保全するための方法であり、根まで掘り返すと、掘り返したところの土壌が雨水などで流れてしまうため、それを防ぐための方法なのです。



オオバコの除去方法
（提供：NPO法人環白山保護利用管理協会）

4. 体験概要

以上の講義の後、参加者は実際の除去作業に挑みました。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止により除去作業が中止となったためか、本年度は例年よりもオオバコが多く繁殖している印象で、除去作業の継続の大切さを実感しました。

除去作業自体は、ひたすらオオバコを切除するという簡単なものであり、老若男女問わず参加することができます。今回は小学生以下の子供も参加しており、スタッフの説明を聞きながら、周りの大人と競ってオオバコの除去作業を楽しんでいました。幼い頃からこのようなイベントに参加することで、動植物の面白さや環境問題に興味を持つ人が増えてほしいと願います。また、参加者から

は、「辺り一面に生えていたオオバコが自分の周りから徐々になくなり、茶色の地面が見えてきて達成感を味わえた」との声も聞かれました。

今回の作業では72.5kgのオオバコを除去することができました。



オオバコ除去作業の様子

5. おわりに

一度、侵入・拡散した外来植物を根絶するのはたやすいことではなく、多くの労力が必要となります。白山の美しい自然、そして生物多様性を次の世代に残すためには、地道にこの除去活動を継続して続けていくことが必要だと考えます。

昨年度は中止、本年度は新型コロナウイルスの感染予防のため、石川県内の協会員に限定して開催することとしました。新型コロナウイルス感染症が収束した際には、県内外より多くの皆さんが外来植物の除去作業に参加頂けると幸甚の至りです。



参加者全員での集合写真

令和3年度 北陸支部防災演習

〈災害対策部会・総務委員会〉

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、企業活動や市民生活において各種影響を受けている状況です。このような中でも建設コンサルタントは、災害発生時にはエッセンシャルワーカーとして迅速かつ適切な対応が求められることから、この重要性に鑑み、今年度も北陸支部防災演習（以下、「支部演習」と略す。）を実施しました。また、同日の13時から15時は建コン協本部による災害時対応演習がありましたので、こちらも取り組みました。

本稿では、支部演習について整理致します。

- ①日時：令和3年9月1日（水） 8:40～11:40
- ②場所：興和ビル10階 会議室（新潟市中央区）
- ③連携した関係機関：
 - ・国土交通省北陸地方整備局防災室（以下、「北陸地整」と略す。）
 - ・（一社）全国測量設計業協会連合会北陸地区協議会（以下、「測量設計北陸」と略す。）
 - ・（一社）全国地質調査業協会連合会北陸地質調査業協会（以下、「地質調査北陸」と略す。）
- ④支部会員の参集者
 - [北陸現地本部] 寺本支部長、大平副支部長、高橋技術総括指揮者、坂上副責任者、渡邊運営委員長、青木総務部会長、佐藤（浩）委員、佐藤（雄）委員、今野委員
 - [リエゾン] 清原総務委員長、浜辺委員
 - [富山] 古池技術総括指揮者
 - [石川] 西川副責任者
 - [事務局] 佐々木事務局長

2. 演習のポイント

演習は、例年と同様に初動段階における情報伝達を主眼において実施しました。演習のポイントは以下の3点です。

- ①北陸地整からの支援要請
 - 北陸地整からのメールとTELによる応援要請の受付と、北陸地整に派遣したリエゾンとのWEBによる情報伝達が適切に行えるか
- ②災害協定に基づいた関係機関との情報伝達
 - 要請内容を踏まえた他2機関とのWEBによる情報伝達が適切に行えるか
- ③支部会員会社との情報伝達
 - 北陸現地本部から支部会員会社へのメールによる連絡と、この連絡に基づいた支部会員会社からの返信が適切に届くか



現地本部での本部長・副本部長

3. 演習スケジュール

主なスケジュールを右表に示します。

表1 スケジュール

時分	項目	情報伝達	
		発信者	受信者
6:00	地震発生	新潟県南西沖でM7.7の地震発生	
8:40	支援要請	北陸地整 防災室	技術総括指揮者(新潟)
8:45	参集連絡	技術総括指揮者(新潟)、総務部会長	支部長、副支部長(新潟)、運営委員長、総務部会長、副責任者(新潟)
	リエゾン派遣	総務部会長	総務委員
9:00	リエゾン地整到着	リエゾン	総務部会長
9:20	北陸支部会議	北陸支部にて現地本部設置に関する協議	
9:25	災害対策北陸現地本部設置	現地本部(事務局)	支部会員会社・災害対策委員 富山・石川の技術総括指揮者・副責任者
		現地本部(新潟の技術総括指揮者・副責任者、総務部会長)	北陸地整 防災室 測量設計北陸、地質調査北陸
9:30	支部会員会社の状況把握要請	現地本部(副責任者)	新潟の災害担当責任者(正・副)
		富山・石川の技術総括指揮者又は副責任者	富山・石川の災害担当責任者(正・副)
9:40	要請内容の連絡	北陸地整 防災室	現地本部(技術総括指揮者)
9:45	要請内容の詳細連絡	リエゾン	現地本部(技術総括指揮者)
9:50	関係機関への要請	現地本部(本部長)	測量設計北陸、地質調査北陸
	リエゾン退去報告	リエゾン	現地本部(技術総括指揮者)
10:30	支部会員会社の状況報告[要請から1時間経過]	現地本部(総務委員)	現地本部(他メンバー)
		富山・石川の技術総括指揮者又は副責任者	現地本部
10:45	関係機関からの報告	測量設計北陸、地質調査北陸	現地本部(本部長)
	支部対応可能会社の整理	現地本部(総務部会長)	現地本部(他メンバー)
	北陸支部会議(北陸地整への報告内容確認)	現地本部(技術総括指揮者)	現地本部(他メンバー)
11:10	支援要請に対する報告	現地本部(技術総括指揮者)	北陸地整 防災室
11:30	支部会員会社の状況報告[要請から2時間経過]	現地本部(総務委員)	現地本部(他メンバー)
		富山・石川の技術総括指揮者又は副責任者	現地本部
【災害発生より90日経過を想定 令和3年12月1日 11:40】			
11:40	災害対策北陸現地本部解散	事務局長	支部会員会社・災害対策委員 富山・石川の技術総括指揮者・副責任者
		新潟の技術総括指揮者・副責任者、総務部会長	北陸地整 防災室 測量設計北陸、地質調査北陸

※網掛け部はWEBによる取り組みを示す。

4. 演習の結果について

(1) 参集

当日、興和ビル10階会議室に9:20までに参集するように対象者に伝え、その結果、全員が所定の時間までに到着することができました。



災害対策北陸現地本部の様子

(2) 北陸地整からの支援要請

- ・北陸地整から、電話と様式を添付したメールによる要請を受けました。
- ・リエゾンとのWEBによる情報伝達、支援要請に関わる北陸地整への報告は支障なく対応することができた。



リエゾンによる対応

(3) 災害協定に基づいた関係機関との情報伝達

- ・三者で初めてWEBによる情報伝達を行いました。こちらも支障なく対応することができた。



関係機関を交えたWEB会議の様子

(4) 支部会員会社との情報伝達

①返信率について

訓練では1時間以内回答を求めて実施したところ、下表の結果となった。

表2 返信状況

	対象会社	手段	返信時間別の状況		小計	合計
			1時間以内	1時間を超え2時間以内		
新潟地区	43	メール	34	7	41	42
		FAX	1	0	1	
富山地区	11	メール	9	2	11	11
		FAX	0	0	0	
石川地区	7	メール	7	0	7	7
		FAX	0	0	0	
合計 [返信率]	61	-	51 [84%]	9	-	60 [98%]
R2年度 [返信率]	62	-	50 [81%]	7	-	57 [92%]

昨年度に比べて返信率は向上したものの、1時間以内返信では大きな改善には至りませんでした。

②ファイル名やパスワード設定について

現地本部への回答では、ファイル名が不適切であったり、パスワード付き添付ファイルによる送付が多いという状況であった。

表3 ファイル名とパスワード設定について ※()はR2年度を示す。

	新潟地区	富山地区	石川地区
ファイル名が不適切	2社 (3社)	1社 (2社)	0社 (0社)
正・副の両者から同じ内容が届いた	0社 (0社)	0社 (1社)	0社 (0社)
正・副の両者から違う内容が届いた	0社 (1社)	1社 (1社)	0社 (0社)
パスワード設定	14社 (15社)	0社 (0社)	1社 (1社)

上表の結果から、当該事項については昨年度と比べて大きな変化はありませんでした。

③その他

現地本部で気がついた点として、「メール回答はあったが必要資料が未添付」「大容量便メールで資料送付してきた会社があり、ダウンロードに手間を要した」「会社が移転して電話が繋がらない」等という問題が確認された。

5. 今後の課題

前項でも記載したとおり、パスワード付き添付ファイルで送付する会社が多かったため、開封作業では非常に手間を要する状況となった。実際の災害発生時では、より混乱した状況での情報把握等が求められると推測できることから、今後、「パスワード設定無し」を条件に演習することも検討したいと考える。

6. 総評

演習終了後、寺本支部長から

- ・リエゾン派遣などから、情報待ちから情報を取る能動的な積極性による活動のスピードアップ
- ・建設関連業の連携を一層強化
- ・デジタル技術等を活用した情報伝達の迅速化・高度化に向けた取り組み

などが大切であるという総評がありました。

7. おわりに

最後になりましたが、北陸地方整備局防災室、(一社)全国測量設計業協会連合会北陸地区協議会、(一社)全国地質調査業協会連合会北陸地質調査業協会の皆様にご多大なるご協力を頂き、支部演習を実施することができましたことを、本誌面をお借りして感謝申し上げます。



一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 北陸支部 会 員 名 簿

令和3年10月1日現在

会 社 名	事業所名	住 所	電話番号 FAX番号
朝日航洋(株)	新潟支店	950-0088 新潟市中央区万代2-3-6 新潟東京海上日動ビル2F	025-249-1150 025-249-1155
旭調査設計(株)		950-0908 新潟市中央区幸西1-1-11	025-245-8345 025-245-8349
アジア航測(株)	新潟営業所	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-28 パーク新潟東大通ビル	025-243-3246 025-247-7969
(株)アルゴス		944-0009 妙高市東陽町1-1	0255-72-3448 0255-72-9426
アルスコンサルタンツ(株)		920-0362 金沢市古府2-76	076-248-4004 076-248-4174
いであ(株)	北陸支店	950-0087 新潟市中央区東大通2-5-1 カープ新潟ビル8F	025-241-0283 025-243-5650
(株)エイト日本技術開発	新潟事務所	950-0087 新潟市中央区東大通2-1-20 ステーションプラザ新潟ビル8F	025-256-8611 025-256-8612
エヌシーイー(株)		950-0954 新潟市中央区美咲町1-7-25	025-285-8540 025-285-3531
大原技術(株)		940-0856 長岡市美沢3-511	0258-35-4511 0258-36-3254
応用地質(株)	北信越事務所	950-0864 新潟市東区紫竹7-27-35	025-274-5656 025-271-6765
(株)オリエンタルコンサルタンツ	北陸支社	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-26 プレイス新潟4F	025-244-7881 025-244-7387
開発技建(株)		950-0914 新潟市中央区紫竹山7-13-16	025-245-7131 025-245-7132
(株)開発技術コンサルタント		951-8133 新潟市中央区川岸町3-33-3	025-233-0204 025-233-6465
川崎地質(株)	北陸支店	950-0914 新潟市中央区紫竹山5-7-5	025-241-6294 025-241-6226
北建コンサル(株)		933-0941 高岡市内免3-3-6	0766-23-3666 0766-23-3987

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
(株)キタック		950-0965 新潟市中央区新光町10-2	025-281-1111 025-281-0002
(株)協和		933-0838 高岡市北島1406	0766-22-2100 0766-22-7602
(株)協和コンサルタンツ	新潟営業所	940-0061 長岡市城内町3-8-7 蒼柴ビル801	025-889-8302 025-889-8304
(株)クリエイトセンター		951-8133 新潟市中央区川岸町2-8-1	025-232-7121 025-232-7130
(株)クレアリア	北陸支店	950-0973 新潟市中央区上近江2-9-19 レジデンス近江101	025-288-6893 025-288-6894
(株)建成コンサルタント		933-0014 高岡市野村284-1	0766-25-6097 0766-25-5697
建設技研コンサルタンツ(株)		933-0007 高岡市角602-1	0766-21-6126 0766-21-6192
(株)建設環境研究所	新潟支店	950-0965 新潟市中央区新光町6-1 興和ビル7F	025-285-6437 025-280-9750
(株)建設技術研究所	北陸支社	950-0088 新潟市中央区万代4-4-27 NBF新潟テレコムビル	025-245-3883 025-241-9082
(株)構造技研新潟		950-0932 新潟市中央区長潟1204-2	025-288-6800 025-288-6824
国際航業(株)	新潟支店	950-0087 新潟市中央区東大通2-3-26 プレイス新潟	025-247-0318 025-241-4146
(株)国土開発センター		921-8033 金沢市寺町3-9-41	076-247-5080 076-247-5090
国土防災技術(株)	新潟支店	950-2042 新潟市西区坂井1035-1	025-260-2245 025-260-7522
五大開発(株)		921-8051 金沢市黒田1-35	076-240-6588 076-240-6575
サンコーコンサルタント(株)	北陸支店	950-2055 新潟市西区寺尾上4-4-15	025-260-3141 025-268-4950
(株)上智		939-1351 砺波市千代176-1	0763-33-2085 0763-33-2558

会社名	事業所名	住所	電話番号 FAX番号
(株)新日本コンサルタント		930-0857 富山市奥田新町1-23	076-464-6520 076-464-6671
相互技術(株)		950-0994 新潟市中央区上所2-11-14	025-283-0150 025-283-0152
大日本コンサルタント(株)	北陸支社	930-0029 富山市本町3-21 損保ジャパン富山ビル	076-415-7800 076-415-7795
(株)ダイヤコンサルタント	北陸支店	950-2001 新潟市西区浦山4-1-24	025-234-2110 025-234-2111
舘下コンサルタンツ(株)		939-3553 富山市水橋的場234	076-478-0090 076-478-1190
中央開発(株)	北陸支店	950-0982 新潟市中央区堀之内南3-1-21 北陽ビル	025-283-0211 025-283-0212
(株)長大	北陸事務所	950-0965 新潟市中央区新光町6-1 興和ビル6F	025-288-0271 025-288-0273
(株)千代田コンサルタント	新潟営業所	950-0911 新潟市中央区笹口1-19-31	025-244-8445 025-249-4776
(株)ティーネットジャパン	北陸支社	951-8061 新潟市中央区西堀通6番町866 NEXT21ビル	025-226-4330 025-226-3033
(株)東京建設コンサルタント	北陸支社	950-0087 新潟市中央区東大通1-2-23 北陸ビル	025-248-3870 025-248-3877
東京コンサルタンツ(株)	新潟支店	950-0912 新潟市中央区南笹口1-1-12 クラスターナインビル8F	025-246-1827 025-246-7463
(株)東北開発コンサルタント	新潟営業所	950-0154 新潟市江南区荻曾根1-5-15	025-382-6106 025-381-3144
(株)東洋設計		920-0016 金沢市諸江町中丁212-1	076-233-1124 076-233-1224
ナチュラルコンサルタント(株)		921-8066 金沢市矢木2-147	076-246-1170 076-246-4493
(株)ナルサワコンサルタント		950-0964 新潟市中央区網川原1-21-11	025-282-2070 025-284-7993
(株)日本インシーク	新潟支店	950-0087 新潟市中央区東大通1-3-8 明治安田生命新潟駅前ビル5F	025-246-1320 025-247-3740

会 社 名	事業所名	住 所	電話番号 FAX番号
(株)日本海コンサルタント		921-8042 金沢市泉本町2-126	076-243-8258 076-243-0887
日本工営(株)	新潟支店	950-0962 新潟市中央区出来島1-11-28	025-280-1701 025-283-0898
(株)日本港湾コンサルタント	北陸事務所	950-0087 新潟市中央区東大通2-5-8	025-243-0431 025-241-1806
(株)ニュージェック	北陸支店	950-0911 新潟市中央区笹口2-10-1 WIN21 4F	025-243-4471 025-243-4472
パシフィックコンサルタンツ(株)	北陸支社	950-0917 新潟市中央区天神1-1 プラーカ3 6F	025-247-1341 025-246-1005
(株)パスコ	新潟支店	950-0916 新潟市中央区米山3-1-63	025-243-0051 025-241-8654
(株)プラネット・コンサルタント		920-0017 金沢市諸江町下丁372	076-255-0630 076-255-0672
北電技術コンサルタント(株)		930-0858 富山市牛島町13-15	076-432-9936 076-432-4280
北陸コンサルタント(株)		939-8213 富山市黒瀬192	076-493-7717 076-493-7720
三井共同建設コンサルタント(株)	北陸事務所	951-8067 新潟市中央区本町通7番町1153	025-224-1285 025-224-1286
(株)村尾技建		950-0948 新潟市中央区女池南2-4-17	025-284-6100 025-283-0368
(株)村尾地研		939-8262 富山市塚原150	076-429-2511 076-429-2603
明治コンサルタント(株)	北陸支店	950-2002 新潟市西区青山1-1-22	025-265-1122 025-265-1126
八千代エンジニアリング(株)	北陸支店	950-0088 新潟市中央区万代1-1-1 朝日生命新潟ビル	025-243-5454 025-243-5883
(一社) 北陸地域づくり協会		950-0197 新潟市江南区亀田工業団地2-3-4	025-381-1020 025-383-1205
(一財) 新潟県建設技術センター		950-1101 新潟市西区山田2522-18	025-267-4804 025-267-4854

役員・委員名簿

令和3年10月1日現在

北 陸 支 部 役 員			
支部理事	支部長	寺 本 邦 一	開発技建(株)
〃	副支部長	大 平 豊	エヌシーイー(株)
〃	副支部長	渡 辺 正 三	大日本コンサルタント(株)
〃	副支部長	新 家 久 司	(株)国土開発センター
〃	運営委員長	渡 邊 雅 樹	開発技建(株)
〃	運営委員	黒 木 康 生	(株)日本海コンサルタント
〃	運営委員	瀬 川 光太郎	(株)建成コンサルタント
〃	運営委員	末 武 晋 一	日本工営(株)
〃	運営委員	青 木 和 之	エヌシーイー(株)
〃	運営委員	齊 木 勝	(株)キタック
〃	運営委員	笹 谷 輝 彦	(株)国土開発センター
支部監事	支部監事	高 堂 景 寿	相互技術(株)
〃	支部監事	佐々木 大 介	(株)ナルサワコンサルタント

対 外 活 動 部 会			
	部会長	寺 本 邦 一	開発技建(株)
	部会員	大 平 豊	エヌシーイー(株)
	部会員	渡 辺 正 三	大日本コンサルタント(株)
	部会員	新 家 久 司	(株)国土開発センター
	部会幹事	坂 上 悟	開発技建(株)
	部会員	田 中 義 明	大日本コンサルタント(株)
	部会員	長 森 孝 司	(株)日本海コンサルタント
	部会員	渡 部 長 務	エヌシーイー(株)
	部会員	酒 井 大 助	八千代エンジニアリング(株)
新潟地域委員会	委員長	齊 木 勝	(株)キタック
〃	委 員	折 笠 昇	(株)開発技術コンサルタント
〃	委 員	田 邊 敏 夫	(株)クリエイティブセンター
〃	委 員	岩 澤 弘 和	(株)構造技研新潟
〃	委 員	吉 田 茂	開発技建(株)
〃	委 員	坂 西 和 也	エヌシーイー(株)
富山地域委員会	委員長	柴 田 聡	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	田 中 義 明	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	竹 腰 直 治	北建コンサル(株)
〃	委 員	吉 田 勉	(株)上智
〃	委 員	泉 英 樹	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	榮 知 之	北陸コンサルタント(株)
石川地域委員会	委員長	新 家 久 司	(株)国土開発センター
〃	委 員	長 森 孝 司	(株)日本海コンサルタント
〃	委 員	二 俣 秀	(株)国土開発センター

総務部会			
	部会長	青木和之	エヌシーイー(株)
総務委員会	委員長	清原宏二	開発技建(株)
〃	委員	佐藤浩	(株)開発技術コンサルタント
〃	委員	佐藤雄一	(株)構造技研新潟
〃	委員	泉英樹	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	浦正光	(株)日本海コンサルタント
〃	委員	浜辺良彦	相互技術(株)
〃	委員	今野健	エヌシーイー(株)
倫理・法令委員会	委員長	小見直樹	エヌシーイー(株)
〃	委員	田崎友康	開発技建(株)
〃	委員	青木秀典	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	櫻井英二	(株)国土開発センター
〃	委員	河原健二	(株)日本海コンサルタント

技術部会			
	部会長	神田和久	開発技建(株)
統括技術委員会	委員長	藤巻智之	開発技建(株)
〃	委員	真嶋利寿	エヌシーイー(株)
〃	委員	大塚秀行	(株)キタック
〃	委員	杉野亨	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	池淵稔	東京コンサルタンツ(株)
〃	委員	安藤正幸	(株)日本海コンサルタント
〃	委員	加藤毅	(株)クリエイイトセンター
〃	委員	高橋辰夫	(株)開発技術コンサルタント
河川・砂防委員会	委員長	須田玲	エヌシーイー(株)
〃	委員	阿左美敏和	(株)建設技術研究所
〃	委員	西川幸成	(株)国土開発センター
〃	委員	浜谷智	五大開発(株)
〃	委員	太原晶	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	伊藤信哉	開発技建(株)
〃	委員	金子幸生	相互技術(株)
〃	委員	伊藤正喜	(株)開発技術コンサルタント
道路委員会	委員長	木村浩	エヌシーイー(株)
〃	委員	須佐慎	開発技建(株)
〃	委員	吉田要	(株)クリエイイトセンター
〃	委員	森将恒	(株)キタック
〃	委員	木下裕康	(株)国土開発センター
〃	委員	古池豊	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	藤本勇一	(株)東洋設計

橋梁委員会	委員長	初 鹿 明	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	田 村 康 裕	開発技建(株)
〃	委 員	渡 邊 敦	エヌシーイー(株)
〃	委 員	大 竹 滋	(株)キタック
〃	委 員	南 雲 浩	(株)構造技研新潟
〃	委 員	浦 修 造	(株)国土開発センター
〃	委 員	鷹 西 輝	(株)東洋設計
〃	委 員	寺 田 直 樹	(株)開発技術コンサルタント
〃	委 員	塚 嶋 雅 則	東京コンサルタンツ(株)
トンネル委員会	委員長	今 度 充 之	東京コンサルタンツ(株)
〃	委 員	須 貝 浩	エヌシーイー(株)
〃	委 員	麻 田 正 弘	アルスコンサルタンツ(株)
〃	委 員	松 尾 内 助	(株)キタック
〃	委 員	長谷川 哲 也	サンコーコンサルタント(株)
〃	委 員	辻 本 勝 彦	(株)国土開発センター
都市計画委員会	委員長	岩 渕 和 有	エヌシーイー(株)
〃	委 員	飯 田 雅 之	開発技建(株)
〃	委 員	莊 司 洋 文	(株)キタック
〃	委 員	森 川 大 輔	(株)国土開発センター
〃	委 員	酒 井 信 次	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	埜 正 浩	(株)日本海コンサルタント
建設環境委員会	委員長	竹 内 聡	開発技建(株)
〃	委 員	稲 葉 弘 之	アルスコンサルタンツ(株)
〃	委 員	若 尾 明 弘	エヌシーイー(株)
〃	委 員	竹 野 茂 樹	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	西 暢 人	(株)日本海コンサルタント
〃	委 員	辰 橋 浩 二	(株)国土開発センター
〃	委 員	山 井 壯 志	大原技術(株)
若手技術者ワーキンググループ	リーダー	村 田 亨	開発技建(株)
〃	サブリーダー	中 野 達 也	(株)日本海コンサルタント
〃	委 員	濱 田 康 行	(株)国土開発センター
〃	委 員	一 噌 真佐志	大日本コンサルタント(株)
〃	委 員	石 丸 俊太郎	(株)キタック
〃	委 員	杉 田 友 樹	(株)建成コンサルタント
〃	委 員	本 間 千 悠	(株)構造技研新潟
〃	委 員	佐久間 佑 多	相互技術(株)
〃	委 員	飯 野 美 樹	エヌシーイー(株)

広報部会			
	部会長	熊倉孝次	(株)クリエイトセンター
広報委員会	委員長	高橋宏明	開発技建(株)
〃	委員	飯田 互	(株)開発技術コンサルタント
〃	委員	石塚英洋	エヌシーイー(株)
〃	委員	新保和広	相互技術(株)
〃	委員	本間健太郎	(株)ナルサワコンサルタント
〃	委員	國兼 功	八千代エンジニアリング(株)
〃	委員	諏訪 浩	日本工営(株)
〃	委員	坂原 徹	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	大蔵欣司	(株)建成コンサルタント
〃	委員	島 由治	アルスコンサルタンツ(株)
〃	委員	新家哲平	(株)国土開発センター
会誌編集委員会	委員長	齋藤浩幸	(株)キタック
〃	委員	長田宏之	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	古橋伸彦	(株)日本海コンサルタント
〃	委員	藤井和行	(株)構造技研新潟
〃	委員	太田博昭	(株)国土開発センター

災害対策部会			
	部会長	寺本邦一	開発技建(株)
新潟現地対策本部	本部長	寺本邦一	開発技建(株)
〃	副本部長	大平 豊	エヌシーイー(株)
〃	技術総括指揮者	高橋邦夫	開発技建(株)
〃	副責任者	坂上松則	開発技建(株)
富山現地対策本部	本部長	寺本邦一	開発技建(株)
〃	副本部長	渡辺正三	大日本コンサルタント(株)
〃	技術総括指揮者	古池 豊	大日本コンサルタント(株)
〃	副責任者	青木秀典	大日本コンサルタント(株)
石川現地対策本部	本部長	寺本邦一	開発技建(株)
〃	副本部長	新家久司	(株)国土開発センター
〃	技術総括指揮者	笹谷輝彦	(株)国土開発センター
〃	副責任者	西川幸成	(株)国土開発センター
災害対策委員会	委員長	高橋邦夫	開発技建(株)
〃	委員	青木和之	エヌシーイー(株)
〃	委員	坂上 悟	開発技建(株)
〃	委員	古池 豊	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	増山繁雄	北陸コンサルタント(株)
〃	委員	田中義明	大日本コンサルタント(株)
〃	委員	笹谷輝彦	(株)国土開発センター
〃	委員	長森孝司	(株)日本海コンサルタント

編集後記

新型コロナウイルス感染症が日本でも確認されてから、もうすぐ2年近くが経とうとしております。マスクの着用、リモートワーク、WEB会議、不要不急の県外往来の自粛など、新しい生活様式が今や常態化していると言えます。

そんな折、新型コロナウイルス感染症の広がりにより、1年間延期とされた『東京オリンピック・パラリンピック』が先日、閉幕しました。開催の可否について、多々議論が交わされていたことを昨日のように感じます。

オリンピックは17日間、パラリンピックは12日間、感染症対策、水際対策の徹底により、海外からの選手も迎え入れ、熱戦が繰り広げられました。原則、『無観客開催』とのこともあり、多くの国民はメディア観戦と相成りましたが、アスリートの活躍に多くの国民が感動を与えてもらったと思います。

私自身も様々なスポーツと触れ合ってきた者として、感銘を受けました。結果はどうかあれ、今までの鍛錬の成果を表舞台で表現し、力いっぱい戦い抜く姿は、この混沌としたコロナ禍の我々日本国民に生き抜く力を与えてくれたのではないのでしょうか。

今回は3年後、2024年にフランスはパリでの開催です。日本からは約10,000km離れたヨーロッパの地、現地で気軽に観戦という訳にはいきませんが、次回こそ多くの観客で沸くスポーツイベントとして開催されることを切に願います。

太田博昭

発行 / 一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 北陸支部
〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1 興和ビル7階
TEL 025-282-3370 FAX 025-282-3371

会誌編集委員会

委員長 / 齋藤浩幸

委員 / 長田宏之 古橋伸彦 藤井和行 太田博昭



発行

一般社団法人 建設コンサルタンツ協会 北陸支部
〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1 興和ビル7階
TEL 025-282-3370 FAX 025-282-3371
<https://hr-jcca.jp/>